

高齢者への生活支援について —地域住民主体の助け合い活動を事例に—

研究員 松吉 夏之介

目 次

- | | |
|--------------|----------------------------|
| 1. はじめに | 3. 活動が発展・継続していくための
ポイント |
| 2. 「あんしん」の概要 | |

1. はじめに

高齢者が住み慣れた地域で安心してくらしていくために、地域共生社会の実現が目指されている。これは地域における人と人とのつながりを再構築し、高齢者を含む全世代がそれぞれ多様な役割を持ち、支え合うことのできる社会の実現を目指すものである。その背景には、少子高齢化・人口減少、ライフスタイルや価値観の多様化等により住民間の交流が停滞し、地域・職場という人々の生活領域における支え合いの基盤が弱まっている現状がある。地域の高齢者のくらしを支えるために必要なこととして、「医療」、「介護」、「健康づくり」が挙げられるが、地域共生社会においては、地域の支え合いにより「日々の生活支援」を手厚くしていくことが重要とされる。

本誌No.174では、高齢者への日々の生活支援を行うインフォーマルな活動として、「助け合い活動」に触れた¹。そのなかで、JAグループにおいては活動主体として「JA助け合い組織」が馴染み深いが、生活協同組合やワーカーズコープ、社会福祉協議会等、様々な

団体によって行われていること、また、「安心」を確保するための見守りサービス、「交流・参加」するためのサロン提供等、支援（サービス）の内容も多様であることに言及した。そして今般、介護保険制度が発足する以前から地域の課題を汲み取り、自主的に地域活動を行ってきた「特定非営利活動法人JAあづみくらしの助け合いネットワークあんしん（以下、「あんしん」）²」の池田陽子理事長（以下、池田理事長）にお話を伺う機会を得た。本稿では、助け合い活動が生まれた背景を確認するとともに、活動が継続してきた要因等を検討することしたい。

2. 「あんしん」の概要

(1) 活動のきっかけ

「あんしん」の前身は、JAあづみ女性部による助け合い活動である。

現在のJAあづみに生活指導員として入組した池田理事長は、JAは組合員が主役であり、組合員に必要とされる組織であり続けたいとの思いのもと、JA女性部とともに活動

1 松吉夏之介「高齢者の生活を支える地域の助け合い活動について」『共済総研レポートNo.174』pp. 28–33（一社）JA共済総合研究所

2 「あんしん」の活動は「JAあづみ」の助け合い活動（任意団体）から始まったが、2013年にNPO法に基づく法人格を取得した。主な活動フィールドは長野県の安曇野市と松本市。

を続けてきた。それは組合員と学び合いながらくらしのなかでの課題を見つけ、協同意識を育みながら新たな目標を設定し、課題解決あるいは組織の持続を図っていくための活動である。そして、1990年9月にJAあづみ女性部の60歳以上のメンバーで構成される「よつば会」とともに有料の在宅福祉活動（助け合い活動）を始める。それは高齢期を迎える地域の仲間同士が細かなことでも皆で助け合いながらくらしていこうという趣旨のもと始まった活動であり、長野県農協介護大学の研修（のちにホームヘルパー2級の研修会に指定）に参加したメンバーが、支援が必要な人を訪問し、食事づくりや掃除、病院への付き添い、話し相手などの家事援助を行った。その後、よつば会の活動は続くが、池田理事長は1991年4月にJA長野中央会へ出向し、JAの女性部や青年部の事務局、県の生活指導員部会等の業務を担当し、JAの人材育成等に携わることとなる。そのなかで、JAの様々

な計画で用いられる「主体性」や「参加・参画」、「組織の自立」といった言葉を意識する機会が増え、主体的な活動とはどういうものであるのかを常に考えたという。

公的介護保険制度が開始される2年前の1998年3月、JAあづみに福祉課が新設されることとなり、池田理事長はJAへ帰任しJAの高齢者福祉事業を担当する。JAとして新たな福祉事業を行うにあたって、池田理事長は「JAは組合員というメンバーシップのもとで成り立つ組織であり、組合員がJAに満足し、JAに参加し、そのことが結果として事業につながっていくのが理想である。ホームヘルパーの資格を持っている人たち（よつば会のメンバー等）とともに、何を共有しながら次の活動を展開しようか」ということを考えることとなった。「JAは農業者の団体として、明るい地域社会を築いていくという思いで立ち上がった組織であり、JAを構成するメンバー（組合員）で、どのような地域を

あしたへのあんしん

作詩 池田陽子
作曲 ワイズセツション
体操指導 奥原いづみ

だれもが思う老後のこと

お互い たつた一度の人生を

住みなれた土地 住みなれた家で

つつがなく 明るく

いきいきとくらしたい

人が人を援助する

困ったときはお互いさま

元気なときには協力を

困ったときには助けてもらう

人と人が自然のままに

心と体を支え合い

みんなで力を出しあつて創ろう
温もりのある地域と

あんしんしてくらせる里を

(出所)「特定非営利活動法人JAあづみくらしの助け合いネットワークあんしん 第8回 通常総会資料（令和2年度）」より

※ 「あしたへのあんしん」の詩には「あんしん」の理念が込められており、様々な活動のなかで歌われ、歌に合わせた体操も行われている。

築していくかということを福祉・助け合いの視点から考えることが必要である。当然、人は歳をとる、急に歳をとるわけではなく、なだらかに老いていく。なだらかに老いていくということは、働くなかに生きがいを求め、そして自分の生き方を追求しながら生きていくことである。農家の女性の生きがいづくりの場、抱える悩み等を言い合える拠り所を地域の中に作り、ひとりになっても、病気になっても、地域に支えられながら安心して老いていける里を自らの力で築いていこう」という思いのもと、JAに福祉課が新設された4か月後に、JA女性部の助け合い活動を再構築する形で「あんしん」の活動は始まった。

(2) 活動内容

「あんしん」の主な活動には、生きがいづくり・健康づくり、福祉サービス、里づくり、学習・研修、JAや行政等との連携・協働、地域支援事業に関する活動がある。

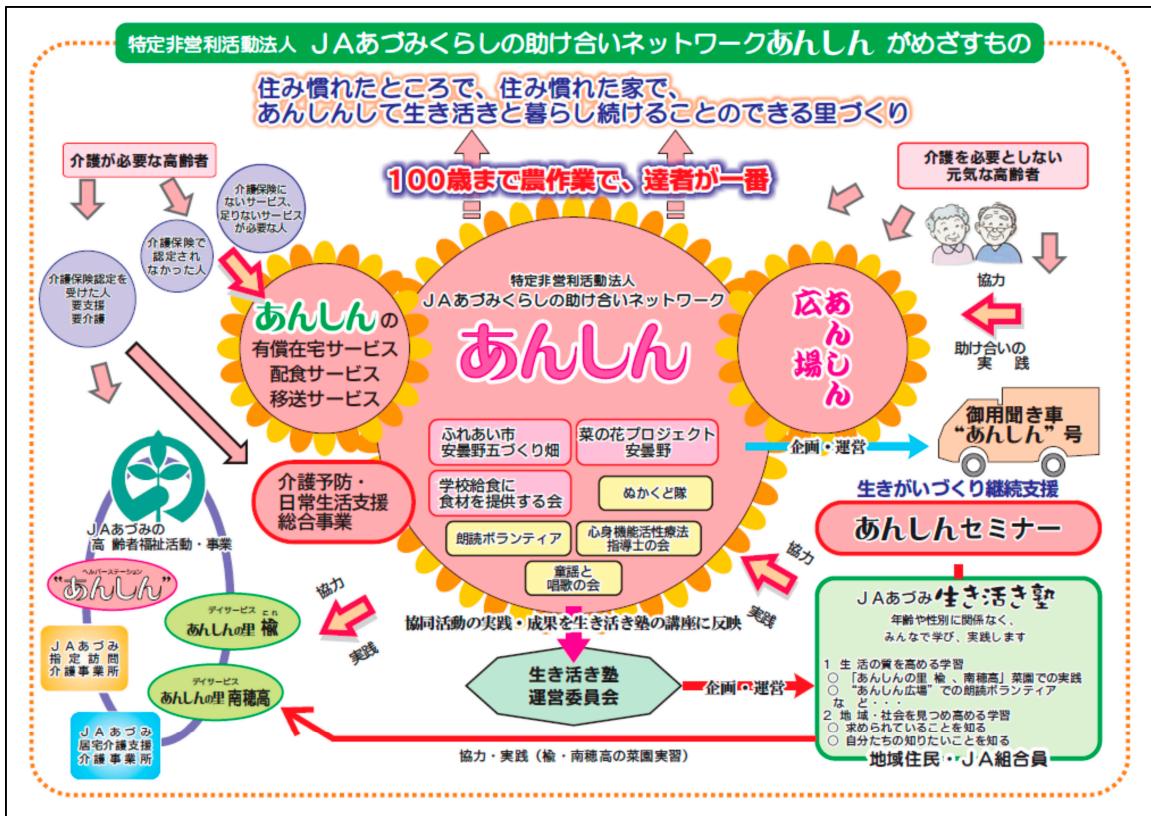
まず、生きがいづくり・健康づくりに関する活動に「あんしん広場」の開設がある。それは、住み慣れた地域で安心して生き活きとくらすこと、地域で「独りばっち」をつくらないことを目的に、地域の様々な人々が気軽に集まることのできる、拠り所づくりの活動である。あんしん広場では、おしゃべりやお茶会をはじめ、血圧測定、交通安全教室、体操やカラオケ大会、七夕やお彼岸等の行事と行事のための食事づくりなどを行っている。他にも、食や農、認知症・福祉等の各分野の有識者を講師として招いた「あんしんセミナー」を年に10回ほど開催している。あんしんセミナーは、くらしに関する様々な話題をテーマに、地域で安心してくらし続けていくための「生きがいづくり教室」に位置付けられている。

福祉サービスに関する活動としては、有償在宅サービスがある。入浴や着替え等の身体介護サービス、公的介護保険給付の対象とならない、草むしりや障子貼り、洗濯や部屋掃除等の家事援助サービス等を提供するもので、「あんしん」の前身のよつば会で行っていた活動を拡げたものである。また、配食サービスも行っている。

里づくりに関する活動には「五づくり畠」の運営がある。「あんしん」では自給率向上が地域の未来を創っていくとの考え方のもと、①家庭菜園を充実しよう、②家庭果木（果樹）をつくろう、③大豆雜穀をつくろう、④鶏を飼おう、⑤手作り加工をしよう、の五項目から成る自給率向上運動（五づくり運動）に取り組んできた。五づくり畠とは、活動メンバーの家庭で栽培した野菜等を販売する直売所であり、月に1、2回開催している。また、菜種の作付け、菜種油の搾油等を行う「菜の花プロジェクト」にも取り組んでおり、菜種油は学校給食に提供もしている。ちなみに、「あんしん」には菜の花プロジェクトとは別に、「学校給食に食材を提供する会」というグループ活動もあり、菜種だけでなく野菜を作つて学校給食に提供している。そして、五づくり畠の売り上げや寄付等により移動購買車両（御用聞き車あんしん号）を購入し、買い物に困っている地域の高齢者への食料配付や安否確認を行っている。こうした里づくりに関する活動は、例えば、子どもたちと一緒に学校で給食を食べる機会があることや、年金が少なくなっても五づくり畠で孫への小遣い稼ぎができることなどから、活動メンバーの生きがいにもつながっている。

「あんしん」には、前述の「学校給食に食材を提供する会」の他にも複数の活動グループがあり、地域のデイサービスセンター（通

図表 「あんしん」がめざすもの



(出所) 「あんしん」池田理事長の提供資料より

所介護施設) やあんしん広場では「心身機能活性療法指導士の会」、「童謡と唱歌の会」、「朗読ボランティア」等のグループも活躍している。学習・研修に関する活動では、そうした各グループの研修会を行っている。

「あんしん」の活動を続けていくためには、人材が必要である。そこで、なぜこの地域で頑張って生きていかないといけないのかとともに考え、人材を育成する場として、「生き活き塾」という学びの場をJAあづみと協働して作ってきた。「生き活き塾」は「くらし(生活)」を「生き活き」させる塾ということで、JAあづみに福祉課が新設され「あんしん」の活動が始まった1998年に立ち上げられた。

「農の心」を基本に、年齢も性別も様々なJA組合員・地域住民が集まり、くらしていくう

えでの課題を話し合い、学習を通じて解決策を考え、活動に展開していくことが目的としている。受講期間は1期2年で、平均すると年20回ほどの講座が開講され、皆で学び合うと同時に「安心してくらせる地域を創るのは地域でくらすみんなである」ということを根底に、塾での学びを「家庭で実践、地域で実践」することがモットーとして掲げられている。塾生の多くは「あんしん」の活動メンバーとなっている。

また、活動を続けていくためには活動費も必要なことから、行政から地域支援事業を受託している。受託事業においても着実な成果を上げており、行政との信頼関係が築かれていている。

(3) 活動の仕組み

「あんしん」は、正会員と賛助会員、利用会員からなる。主体的に活動に参加しているのが正会員で、団体の趣旨に賛同し活動費等を寄付する形で参加しているのが賛助会員である。そして、有償在宅サービス等の各種サービスを利用しているのが利用会員である。正会員は約150名、賛助会員は100名弱、利用会員は約120～150名で、会員数は合計400名ほどとなっている。

法人としての「あんしん」には、理事会・幹事会の下にNPO委員会がおかれている。複数のグループによって活動が行われていることを前述したが、NPO委員会は各グループのリーダー等、50名ほどで構成される。会長・副会長だけでなく、会計や監査等の役職も置かれており、活動者自身が役割を持ちながら法人運営に参加している。

「あんしん」の活動メンバーは、ホームページ等でも募集しているが、あんしんセミナーやあんしん広場等のイベントを魅力的なものにすることで人材を呼び込んでいる。特にあんしんセミナーのカリキュラム編成には力を入れており、若い世代にとっても興味が湧きそうなテーマを設定し、学習の延長線上に活動があることを意識してもらえるよう心がけている。

また、地域支援事業を行政から受託しているが、そのなかで介護予防教室「おたっしゃ塾」を実施している。この活動は、長野県の佐久総合病院へ再委託しており、同病院の医師や看護師、保健師、栄養士等が「あんしん」に出張し、講座を開講している（「あんしん」が事務局を担う）。安曇野市では、「あんしん」が活動する豊科地域を含め、5つの地域に介護予防教室を委託しているが、開講しても受講者がなかなか集まらないことが多いのが現

状のようである。ただし、豊科地域のおたっしゃ塾は好評で、行政や他団体との連携を図ることは、「あんしん」の職員や活動者のモチベーションアップにもつながっている。

3. 活動が発展・継続していくためのポイント

「あんしん」の活動内容を踏まえ、助け合い活動が発展・継続していくためのポイントを3点挙げる。

まず1つ目は「学習」である。「あんしん」の活動を支えてきたものとして、前述の「生き活き塾」がある。生き活き塾はJAあづみが事務局となっているが、「あんしん」の活動を通じて発見された課題や成果が講座の企画や運営に反映されており、次代の「あんしん」の活動メンバーを発掘・育成する場となっている。また、「あんしん」独自の活動として、「あんしんセミナー」も開催している。「あんしん」は地域の課題を認識・共有する場、安心してくらしていくために必要なことを学習する場を提供している。

2つ目として「法人化」が挙げられる。「あんしん」はJAあづみの組合員（女性部）の助け合い組織を再構築する形で発足したが、発足から15年が経過した2013年にNPO法人として再出発した。NPO法人となる前は、JAあづみの福祉課内に事務局を置きつつも、「あんしん」という任意団体として、代表者の個人名義で口座を作り、計画策定や会計処理も行ってきた。こうした運営体制について、さまざまな学習を重ね地域活動を実践してきたメンバー（正会員）の中から現状に対する疑問や限界の声も上がってきたという。例えば、前述の移動購買車両を購入するに際しては、任意団体である「あんしん」の名義では購入することができず、購入資金をJA

に寄付し、JA名義で購入したことである。また、高齢化が進み、介護保険外の有償在宅サービスへのニーズが高まるとともに、「あんしん」の同サービス利用が拡がっていましたが、長野県からはJAあづみの介護保険事業（活動）と明確に区別するようにとの指導もあった。JA内の任意団体という位置づけではサービス提供の継続が困難なこともあります、法人化によって、社会的信用が得られる、責任が明確になり継続性を持った体制を構築できる、組織名義で契約を結ぶことができる等のメリットがあることがメンバー間で共有され、NPO法人化に至った。また、池田理事長によると、「地域で安心してくらしていく」という思いを継続させるには変化が必要であり、NPO法人化は地域のニーズを継続的、事業的に進めていけるのではないかと考えた結果」とのことであった。法人化してから3年後の2016年には、安曇野市長へ提言書を起草し、寄り合い所、支え合う場、仕事づくりの場、参加する場の拠点として「地域支え合いセンターあんしん」を竣工した。法人化は、行政や他団体との連携の深化にもつながり、活動に継続性と拡がりをもたらしたといえよう。

そして3つ目は「活動の循環・連携」である。前掲の図表（25ページ）からわかるように、「あんしん」の活動は循環し、つながっている。JAあづみの「生き活き塾」に運営委員として参画し、地域でくらしていくうえでの課題を共有し、課題解決のための活動メンバーを募集・育成し、「あんしん」の活動を通じた課題解決を図っている。「あんしん」の活動内においても、各グループのメンバーはあんしんセミナーやあんしん広場等でつながり、地域の課題や活動における課題を共有し、新たな活動や生き活き塾の企画を生み出して

いく。こうした活動・学習の積み重ねは、行政や他団体からの信頼形成につながり、活動メンバーのやりがいや生きがいとなっていく。また、生き活き塾が活動メンバーの育成の場となる一方、あんしんセミナーは活動メンバーの子や孫の世代が気軽に参加でき、活動を次世代につなげる場にもなっている。例えば、有機農業や環境問題、SDGs等をテーマとして取り上げ、地域が持続していくための、世代を超えた学びの場を作っている。地域でどのようにくらし続けていきたいかを地域にくらす人が自ら考え、「住み慣れたところで、住み慣れた家で、安心して生き活きとくらし続けることのできる里づくり」を目指していくための仕組みを築いている。

引き続き、助け合い活動を行う団体等を調査し、地域共生社会で求められる「支え合い」について考え、報告していくこととした。

（謝辞）

大変お忙しいなか聞き取り調査にご協力いただきました特定非営利活動法人JAあづみくらしの助け合いネットワークあんしんの池田陽子理事長、関係者の皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。